

棚田康司展

十一の少年、一の少女

2008年9月21日（日）－12月25日（木）



彫刻家棚田康司（1968-）は、一本の木を外から彫りこみながら、子供たちをなかから立たせようとし、髪の一筋、柔らかな目尻、浮き上がる肋骨、木肌を残した皮膚の色、緻密な観察による未成熟な人体は、どこか中性的で、その先の変化を予感させる姿態をとっています。彼の彫刻は、木との出会いからはじまり、その内部を丹念に見極め「木取り」をしていく、素材と徹底して向き合う過程のなかからうまれます。彼自身が見聞きした出来事を引き金とし、実在の人物への洞察をもとに、個別の性格と、我々の誰にも訴えかけるような内面をとりだします。このように、彼は、身近な日常の小さな手ごたえを、願いをこめて、人間の奥深く届くものへと変えていきます、

2001年のベルリン滞在以後、塑像術をその基とする西洋彫刻技法に、対置し呼応するように発展してきた、日本伝来の木彫技法を再認識するようになります。そして、かるうじて立っている弱々しさをあらわすため、そこから転じて彫刻を強く存在させていくように、子供像を追求する主題として選び、発表を重ねます。

このたびヴァンジ彫刻庭園美術館における個展では、二年間の取り組みの成果ともいえる新作「十一の少年、一の少女」を発表します、これらの子供像は、ある種の緊迫を保ちつつも内なる変化を秘め、その迫真的な表情のなかに、各々の意志の萌芽を探り出しているようです、また、立像に加えて、胸部までの像をおりませ、高低と動静の変化をつけながら、個性と人格を多彩に分化させて、館内に設置されます、今まさにのびゆき、ひそやかにたたずむ、十二の存在をご覧いただけることでしょう。

アーティストトーク

棚田康司×山本和弘（栃木県立美術館シニア・キュレーター）

日時：2008年9月21日（日）14:00-

場所：ヴァンジ彫刻庭園美術館展示棟

棚田：これは、初めて大きな木を切って靴を作るという課題があったのです。作っているなかで木という素材が変わる瞬間というものを、作っていながら体感した、初めての作品なのです。

山本：ちょうど今から20年くらい前、ここから今回の新作へと、今日の2008年の現在の作品へと直線的に来たというよりは、紆余曲折を経てきたように思えます。その辺のお話を伺わせてください。

棚田：僕は大学を二浪して入っていたのですが、当時木彫がとても活気がありまして、木彫作家が色々なところに出ていました。舟越桂さんとか、深井隆さんであったり、それが、僕の中から見たら非常に恰好がよくて、もちろん外国への憧れもあったのですが、同じ日本人として尊敬できるアーティストのように映りました。僕自身も後を追いかけて、木彫の作家になりたいと、学生のときに漠然と思いました。先ほどの木の靴を作ってみて、ある種の素材が変わる瞬間を体感したのですが、それと同時に、塑像の制作を試みたのですが、そこで疑問がでてきて、実在で制作する方向に戻っていきます。これは授業外で作ったのですが、不思議な感じの後輩の女の子の写真をとらせてもらって、そこから木彫に起こしてみました。できあがってみたらやはり誰かの作品に似ているんですよ。もちろんあの人だと皆さんもご存じだと思いますが、舟越桂さんなのです。自分で作っていてこれではだめだ、と、こういう方法で制作をしていけば、作家として何も棚田康司というものを出せないな、と思いました。ここから、木彫というやり方で顔が作ることができなくなりました。

山本：先ほどご自分に対して厳しい見方が出てきました。お話の中で出てきた、彫刻の制作方法について、フィギュラティブ（具体的）なかたちをつくるときに、彫刻と実際の生身の人間との間に写真という媒体をはさんでいることが僕は面白いと思いました。いまさら驚くべきことでもないのですが、人間という生身の三次元空間を占めている立体と彫刻のあいだに、立体物をつくるのに、二次元の平面を介在させているのが、興味深いです。

棚田：ここからが、ヴァンジ美術館の入り口から下りてくる中間にある作品なのですが、「星の少年」です。この作品を見ていただくときに、向こう側の庭の方を見ていただければいいなと思っています。ヴァンジさんの彫刻と池があるのです。この池と作品の下側のレースの部分、僕はこれを宇宙と考えたのですが、これを重ねていただければいいと思っています。（台座の板は）透明板であることが重要だと僕は考えます。透けてみえなくては意味がないと思います。新たな発見なのですが、天気のいいときには、アクリル板に、空が映って非常にきれいだなと思いました。そんな発見ができたことがうれしかったです。

（「萌木の少年」について）これはヴァンジ美術館の中二階に通路があるのですが、その通路か

ら大きな窓が見えます。その窓のところから外を見ている、作っているときから、そのような想定で制作しました。ですから、目は緑色になっています。

Q：近寄るとシナモンのような匂いがしますよね。これはカヤ材でできたものですね。

はい、カヤ材という針葉樹でできています。仏像にも使われている木ですが、初めて使ってみました。

山本：結構色々な木を使いわけているというような気がします。これは作り出すイメージに関係しているのですか？

棚田：全く関係はないです。材木屋さんに行ってピンと来たものを、それにしようかと思いました。色々ある中で買わないときもあります。ピンと来ないものもありますが、何かこの人だったら友達になれる、というものがあるではないでしょうか。それに近いような気がします。

山本：弘法は筆を選ばず、といった感じなのではないでしょうか。

棚田：彫刻に適しているというものがあれば、それは見定めますが。そのなかで、自分が材木屋さんと話をしたりして、これはというものがあれば買います。

山本：実際にやってみたときに、あれっということはないのですか？

棚田：早い段階で見つけておいて、木取りしておきます。夏を経験したときに割れてしまうこともあります。そうしたら、割れたところなどは、こういう木なんだ、ということ考えていきます。

山本：12体は、12という数字は干支とか月とか、そのようなものに変換するという意味でもあったのでしょうか？

棚田：12というのは干支とかいう意味もあります。それが、一番強かったのですが、モデルを見つけるときに、身近な人からそれぞれ女性の方に干支を聞いて、「写真をとらせてください」と声をかけていきました。僕が12体を集めて、顔を少年の顔に変えて作るというのは、あくまでもモチベーションだけの問題です。蕾の少年は蕾の少年で、入道雲の少年は入道雲の少年で、それぞれこれはこれ、という形で作っていきます、そうでないと、12という数の中で作品同士が殺しあってしまうって、つぶれてしまうかなと思います。できる限り幅をもたせていくためには、僕自身が十二支にしがみついていたのは駄目だな、と思いました。その都度その都度僕が考えていった結果として十二体になりました。

#### ワークショップ

「棚田さんと一緒に彫刻をつくってみよう」

日時：10月26日（日）13：00—16：00

場所：ヴァンジ彫刻庭園美術館展示棟内

対象年齢：小中学生